

8. レポートの文章表現

文末編

レポートを書くとき、文章の末尾をどのように締めたらよいか迷うものです。ここでは適切な文末表現のポイントを説明します。表現について迷う時は、担当の先生に積極的に質問してみるとよいでしょう。

「である」と「です・ます」

手紙を書くときのように「です」「ます」で書いてはいけませんか。

→ 特に指定されない限り、「である」調で書くのが普通です。「です」「ます」調の文章は、読者が子どもであるとき(童話、絵本など)や不特定多数の読者にPRするときなどに使われます。レポートの読者は科目担当の先生ですから、使わないのが原則です。

「と思う」「と考える」と「と考えられる」

「と思う」「と考える」と書きたくありませんか。「と考えられる」という言い方もありますが、それは「と考える」とどのように違いますか。

→ 「と思う」「と考える」は主観的に感じたり思ったりしていることを表す文章表現です。一方、「と考えられる」は、「○○という事実(あるいは真実の情報)に基づいて分析したり考察したりした結果、このように結論できる」というように、「合理的な判断に基づく結論」であることを明示できます。一般的にレポートは調査結果や考察を述べ、それから導き出される結論を述べることが多いので、なるべく「と考えられる」という表現を使ったほうがよいでしょう。ただし、分野によっては主観的な考察を求められるレポート課題が出されることもありますので、課題によって表現を使い分けるようにするとよいでしょう。
ちなみに、アメリカの大学では「I think...」という表現は厳しく禁止されます。「あなたがどう感じているかは学問研究とは何の関係もないことだ」と叱られるそうです。

「推測する」「推察する」

「考えられる」の代わりに「推測する」とか「推察する」と書くのはどうでしょうか。

→ どちらもレポートにおいて妥当な言い切りの形です。ただし若干の違いがあることを心得ておいて下さい。「推測する」は有形なものや量的なものについて用いられることが多く「推計する」という意味に重なります(例:21世紀後半の労働人口は現状の半分に近くなると推測されている)。これに対して、「推察する」は、表面的な現象から法則や真理を推し量っていくという意味を持ちます。言い換えると、論理的かつ抽象的な推理を述べるときに使われることが多い、と言っていいでしょう。

「である」「のである」

「である」と「のである」は違いますか。つい「のである」と書きたくありませんか。

→ 微妙ですが違いがあります。「である」や「であった」は単なる断定です(例:立教大学は四年制の私立大学である。創立は1874(明治7)年であった)。これに対して「のである」「のである」は、①特に念を押して断定または否定したいとき、②人に何かを言い聞かせたり、おごそかに言い渡したりするときなどに使われます。また③それまで述べてきたことをまとめて結論的に言うときに使われることもあります(例:20年前と比べて人々の間の絆は確実に弱くなっている。過度の競争と自己責任の強調がそれをもたらしたのである)。
このように「のである」は特に断定的であり、陳述したいことを完結した形で述べるという働きを持っています。それだけに、乱用すると押しつけがましい感じを与えます。「論文やレポートの中から『のである』は全部追放しなさい」と指導する先生もおられるほどです。特に強調したいとき以外は、なるべく使わないようにしましょう。

受動態と能動態

論文にはなるべく能動態を使う方がよい、と聞いたことがありますか。

→ その通りです。例えば「○○審議会の答申には□□と記されている」と受動態で書くのではなく、「○○審議会は、答申で□□と提案している」と能動態で書く方が、主語と述語の関係をよりはっきりと示すことができます。

悪文編

悪文とは、分かりにくい文章のことです。以下に悪文を避けるためのポイントを紹介します。

1. パラグラフの始まりは一字下げ。

2. 途中で主語が変わる場合には主語を省略しない。

[悪い例] 少子化が進んだため労働力の確保が難しくなり、人材を海外から補充することを計画した。

▶ 途中で主語が変わる場合には主語を明記しましょう。後半に「政府は人材を海外から補充することを計画した。」のように主語を補いましょう。

3. 接続助詞の「が」を多用しない。

[悪い例] 地球温暖化が問題となっているが、日本は、温室効果ガス排出量の削減目標を定めたが、こうした目標を定めていない大国もあり、いまだ決定的な解決策は見出されていない。

[修正例] 地球温暖化が問題となっている。そこで、日本は、温室効果ガス排出量の削減目標を定めた。しかし、こうした目標を定めていない大国もあり、いまだ決定的な解決策は見出されていない。

▶ 適切な接続詞を用いるなどして、不必要な「が」で文と文をつなぐことは避けましょう。

4. 助詞の「は」と「が」の使い方に気をつける。

[使い分けの例] ① 政府は大学生の就職状況について検討を行った。

② 政府が大学生の就職状況について検討を行った。

▶ 「が」は主として主語を強調したいときに用います。②の例では、検討を行ったのは、(大学や経団連などではなく) 政府であることを強調した印象になります。特に強調する意思がない場合は、「は」を使いましょう。

5. 主語と述語の関係を明確にする。

[悪い例] 日本とスウェーデンとの際立った違いは、市民主体性の欠如である。

▶ 市民主体性が欠如しているのは、どちらの国が分かりません。例えば、「日本とスウェーデンとの際立った違いは、前者に市民主体性が欠如しているという点である」と書き換えると意味がはっきりします。

6. 学術的な文章にふさわしい表現を用いる。

[悪い例] そして、マフィア自ら土木会社や建設会社を設立し、建設業界に食い込んでいったのだ。

▶ 学術的な文章では、文末に「である」「た」等を用いるようにしましょう。

7. 引用ではないカギカッコを多用しない。

[悪い例] 西洋音楽の「革新」を志す人々も、ウィーンのもつ「伝統」の中から生まれた。

▶ 言葉に何かの意味を持たせるために、「」で単語を囲むことがあります。しかし、その説明が十分でなければ思わせぶりになるだけです。また、引用を行っているとは誤解される可能性もあります。引用以外の「」の多用は避けるようにしましょう。

8. 一つの文に、多くの事柄を盛り込みすぎない。

[悪い例] ダイエットに適しているのは、無酸素運動ではなく、ウォーキング、ジョギング、水泳などの有酸素運動で、体についた脂肪を落とすためには、20分以上の有酸素運動を行わなければ効果が期待できないといわれている。

[修正例] ダイエットに適しているのは、無酸素運動ではなく、ウォーキング、ジョギング、水泳などの有酸素運動である。ただし、体についた脂肪を落とすためには、20分以上の有酸素運動を行わなければ効果が期待できないといわれている。

▶ 一文で多くのことを言おうとすると、論点が不明確になり、読者に伝わりにくくなる場合があります。上の例では、下線部を切り離して別の文にすると、全体の意味がより明快になります。

9. 修飾語がどこにかかるのかをはっきりさせる。

[悪い例] キャリアセンターは、難しい大学生の就職状況について検討を行った。

▶ 「難しい大学生」なのか「難しい就職状況」なのか分かりません。修飾語は、修飾したい語の直前に置くようにしましょう。

10. 受身表現を使いすぎない。

▶ 受身表現を多用すると主語が曖昧になります。受身表現はできるだけ避けましょう(前ページの「受動態と能動態」を参照)。